

教団論へのアプローチとしての

二・三の問題点

高橋堯慧

1、問題の提起

十九世紀以来西欧では明らかに一つの普通世界を形成していたキリスト教が衰退して、非キリスト教化の波がおしよせている。わが国でも明治のいわゆる廃仏毀釈いらい近代化の進行と仏教進展とは必ずしもその歩みを共にしていない。そうした中において、一方に寺院教会が人の心の救済機関であることをやめている事実があり一方にいままで可能でなかった、汎世界的（エキュメニック）な真に宗教という言葉にふさわしい一体化の動きがある。一言で云えば宗教の衰退が、宗教的知性のレベルアップの母胎であるかのような観さえあると思われる。

今日いずれの宗派においても新らたな教団論とその組織の再編が云々されている背後にはこのような背景が、制度としての宗教に対する衝迫として存在するのをまず確認せねばなるまい。

2、人間の存在構造

宗教とは一言でいえば、人間と人間がその中で生き死にする普遍的実在（＝真如実相）の本質に関する認識の問題であろう。

例えば二千年にわたるローマ教会のアナタシウス時代から現在に至る全論争の歴史は、すでに予定されている神の恩寵と人間の自由意志との関係に関する論争の歴史に要約できよう。仏教においても同様、浄土系の語彙で云えば一切衆生を済度しようと発願した弥陀の普遍的慈悲とそれに絶対帰依しようとする人間の自由な意志の問題であった。即ち凡そ人間の思想の歴史は、個体と普遍的実体との関係の認識の歴史であるといっても無暴な要約ではなからう。

それは西欧の中においては、いわゆる「普遍論争」として中世史を一貫した問題意識であった。仏教においても同様である。かの西遊記の説話などはそういう人間存在の構造を大衆むきに説話化したものであろう。

観念論たると唯物論たると、宗教たると、近代哲学たるとを問わずギリシヤ以来の人間の精神の歴史は一つの主題に集中しているように思われる。つまり普遍と個別、神の恩寵と人間の自由な意志、類と個の本質に関する認識である。それは宗教の言葉で云えば「救済」近代哲学の言葉で云えば「自由」の問題だといえるだろう。なぜそうなのか。ありうる答えは一つである。おそらく自然の中の人間の存在構造がそのようなものだからなのであろう。

3、救済、自由への衝動

われわれの個体は肉体と精神との連続体にはかならない。ところがわれわれの生活は第一に個体と自然との相互交渉として第二に個体と類との相互交渉として営まれている。

故にわれわれの生活は、目的の設定とその充足のための合理的手段の選択という形をとらざるをえない。即ち客体と主体、認識と対象、他と自己、目的と手段という二元的、分析的認識方法をとらざるをえないのである。

即ち人間が「自然」と「類」に依存し、且つ対抗して独立の生存を維持していくために欠き得ぬところの行動と認

識の生物学的ボタンなのである。

仏教では「衆善奉行・諸悪莫作」という。あらゆる仏教宗派のミステールは一言に縮めればこれ以外にないと思う。宗教にとって「衆善奉行・諸悪莫作」とは目的でない。従って衆善奉行がイデオロギー化して人間を評する外面的基準になってしまふとき、それ自体一つの悪になる。鎌倉仏教の教祖たちは、全くこのような価値の外面化に反対した人たちである。かれらは衆善奉行主義に反対したのである。ナザレのイエスも同様である。彼は律法を重んじ、律法主義を果敢に批判して呪うべき木にさらされた。親鸞の悪人正機は、諸悪莫作とは矛盾するがこれ程同じものなのである。

しかし生体の機制としての合理的思考の二元的分裂は、生物学的意味での個体のみ特有な現象ではない。われわれをとりまく社会的環境などさまざまな層にわたって各種の分裂と対立が累層的に体系化されている事実を否定できない。

しかし我々は意識をもつ存在である。意識はつねに普遍を求める。したがって我々は社会的環境の問題においても個体の問題においても、つねに生存条件の安定と拡大を求め、更にそれを超えてすべての差別と不平等を一つにした普遍的全体的な存在条件を求めざるを得ないのである。いづれにせよ人間存在における救済||自由への衝動は、個体と種の両方にビルトインされている。人間の生存の形式に固有な衝動なのである。

したがって高等宗教とは、身心の連続体としてのわれわれの個体が、失われた身心の同一性を、個体の精神という範疇で再獲得しようとするために古来より会得された伝統的な方法の一つであるといえよう。故に全ての高等宗教に内在する性質を定義すれば、宗教とは高度の普遍能力をもつ人間の精神が個体の限定(原罪、煩惱)を認識しかつ個

体のみの論理では可能でないところの普遍的・全体的世界の感觸（恩寵・見性）を個体をこえたいわばスピリチュアルビーイング―普遍的実体の存在を受容することで実現しようとする精神の体系のことであるといえよう。

現代の牧師僧侶の中で、人間の不安動揺を現代科学や文明のせいに行っている人たちが少くない。科学と文明の発展は人類の不可欠の趨勢である。現代における「教団」の問題は以上の事実の確認——高等宗教が人間存在にたいしてもっている積極的な意味と、制度としての宗教が傾向としてもつ反動化への衝動に対する否定的な意味との確認なしではいかなる論議も有効ではないであろう。

4、現代の教団

1、全て宗教の問題は「人」である。現代キリスト教の問題は牧師の問題であり、現代仏教の抱えているのは僧侶の問題である。

2、ただし現代宗教が「人」の問題だということは僧侶をただ僧侶というだけの理由で聖人君子であることを要求することではない。文字通りの高僧知識もいるだろうが、それは才能である。努力は必要だが限界がある。われわれは凡庸な絵書きにゴッホになれと強制はしない。なぜならば全部がゴッホになれないからである。牧師僧侶に限ってそういう強制のような批判がなされる。というのは批判する側に宗教に対する一種情緒的な願望があるの、僧侶の側として、現代人に強い潜在的な宗教的要求がかくされているのをみすこしてはならない。教団の問題は民衆の潜在化した宗教的要求の認識とそれへの対応の問題であろうと思う。

3、この錯綜した産業社会にあって、人間の疎外観は増大し、人間の魂のうえは、洋の東西を問わず大きな問題となっている。しかし現代の寺院教会が何を提供してくれるだろうか。牧師はいたずらに真理の超越ばかりを解き、僧

侶はへたをすると石門心学そのけのけのありがたい法話などによっている。こう云う矛盾に一番むなしさを感じているのは、他ならぬ牧師僧侶自身ではなからうか。

現代宗教の問題は、現代人の普遍感覚に対応する教義の問題であり、教義の問題は制度と教団の問題と無関係でない。そして教団の問題は人の問題にほかならない。そしてそれらの問題はたんに「宗教」のみの問題でなく、現代「社会」とそこに生きている「人間」そのものの問題なのである。教団に関する論議はもしそれを本質から追求してゆくなら、そこからしか始まらないし、又そこにかえてゆくほかはないのである。